

人と自然と文化にやさしい地域づくり

山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

明日を拓く—成果を検証する—

9

令和2年 No.1303



■提言 学校の新たな日常

医療法人おのクリニック 院長 小野 薫

■喜び分かち合い PTA活動

下関市立熊野小学校PTA事務
コミュニティ・スクールコーディネーター
藤附理恵子

■新しい職務

【小・中教諭】

光市立周防小学校 上野 僕斗

【養護教諭・主事】

宇部市立藤山中学校 木下 明子

【高・総支教諭】

周防大島町立久賀中学校 宮田帆乃香

■退職後を振り返って

山陽小野田市立高千帆小学校 古谷菜々美

■就任のごあいあつ

山口県立豊浦高等学校 田津 龍平

山口県立萩総合支援学校 松本 和也

光支部 村中 民義

事務局長 山本 晃久

令和2年度 第72回山口県学校美術展 推奨作品
「うんどうかいのかけっこ 楽しかったよ。」

パパもママも応援してくれたよ。

下松市立あおば保育園 年長(受賞時) 浅谷 帆高

あなたのアクションは…

山口県教育会がすすめる
「元気やまぐち」三つのアクション

◎あいさつ 返事で明るいやまぐち

◎笑顔でつなぐ 安心やまぐち

◎ゴミ 落書きのない美しいやまぐち

一般財団法人 山口県教育会

〒753-0072 山口市大手町2-18 TEL 083-922-0383 FAX 083-922-5768

URL <http://www.ykyoikuk.or.jp> E-mail ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp

明治36年4月第1号 毎月1日発行 発行人 会長:倉増誠彦/編集長:西岡 尚

提言 学校の新たな日常

「ザル」の目から考える新型コロナ対策

(六月中旬執筆)



医療法人おのクリニック

院長 小野 薫

(周南市立菊川小学校校医)

日本全体がこれまでの日常を思い出そうとしつつも、「新しい生活様式」を取り入れ、新型コロナがいる世界「ウイズ・コロナ」をどう生きていくのか模索中です。このような中、山口県下の学校も授業再開しましたが、現場の教職員の方々は今も大きな不安を抱えながら、日々対応に追われています。

遅れましたが、私は周南市で内科系診療所を運営しております。専門は循環器内科ですが、新型コロナの専門医でも何でもありませんが、小学校の先生と一緒に考へる中で、このような機会を頂きました。具体的な感染対策はガイドラインに沿ってやって頂いたいと思いますが、考え方の一助となればと思います。さて、昨年までは新型コロナの姿はなく、インフルエンザ(以下、インフル)に対する感染対策が主でした。でもどうでしょう？毎年流行し、学級・学年閉鎖していると、今まで少々の熱、体調不良で学校を休むと、また、正門から堂々とインフルが入ってきていたのです。対策を考えると、「ザル」の目が見えてくると思います。

まず、入り口。感染症が学校に入つてこないために、は、門を固く締めておかないと、インフルの場合、「ズル休み」、「根性なし」と言われ、「内申書に響く」「皆に迷惑かける」と無理して学校に行つてました。つまり、正門から堂々とインフルが入ってきていたのです。今、「新しい生活様式」と言われていますが、新型コロナ対策の一番の肝はここで、「調子悪いな？熱があるかな？」と体調不良を感じたら、休んで学校に行かない。つまり、新型コロナを含め感染症を発症した生徒、教

職員は学校には入つてはいけない。これが前提になつてゐる必要があります。

入り口で発症者をブロックできたとしても、新型コロナは症状が出る二、三日前から周囲に感染させると言われ、ここが厄介です。症状がなければ登校するわけで、無自覚の生徒、教職員から感染が拡がる可能性を想定しておかないと、いけません。次からの対策はそのためのものにもなります。

まずは、「マスクや手洗い」。マスクの装着は昨年までは今ほど徹底されておらず、手洗い、消毒もそこまで強く言われていませんでした。ここはずいぶんと違うはずです。

次に、いわゆる「三密」。流行語大賞になりそうですが、これは今まで意識されていませんでした。昨年までは、「週末に試合(室内競技)があつた」、「模試があつた」と、「三密」で見えなく感染し、週明け多くのインフル患者さんが病院に押し寄せていました。「三密」対策は功を奏しそうです。

有症状者の侵入をできるだけブロックし、無症状者の侵入は避けられないけど、マスク、手洗い、「三密」対策で、感染するウイルス量を減らし、うつりにくく環境を作る。そうすれば最小限で済むということです。

風邪は基本的にウイルス感染症で、他人にうつす可能性があります。今までインフルだけでなく、「ノロが…」「アデノが…」と様々な感染症の流行を耳にしたことがあります。意識がこれかは大切です。

それから、そもそも学校現場で完璧な感染対策は不可能で、限界を知ることも大切です。どんなにやつて

もうひとつ大切なこと。新型コロナは、大人が家庭に持ち込み、子どもにうつすことによって学校に持ち込まれるということです。皆さんご存知のように新型コロナは子どもが少なく、大人からうつされていることが大半です。もちろん、塾や習い事等で、校区を越えた移動が増えると、子どもたちから発生がないわけではありません。また、中学、高校となると行動範囲が広くなります。親、教職員が持ち込まないことに重点が置かれる小学校と異なり、中・高校では生徒自身の自覚も重要です。

どうでしょう？こう考えると、新型コロナの姿が見えてきませんか？インフルのときの「ザル」の目を知り、意識して対策すれば、なんとか戦えるはずです。最後に、インフル対策を「ザル」と言いましたが、インフルと共に生きる生活様式であつたとも言えます(リスクをある程度踏まえ、生活経済を謳歌していた)。ご存知のとおり、インフルも「スペイン風邪」と言われた頃は、世界中で猛威を振るい、多くの命を奪いました。まさに今の新型コロナと同じだったわけですが、その後人類は予防策を知り、ワクチンや治療薬も手にし、インフルと共に生きてきました。新型コロナも早くそんな日が来ることを祈るばかりです。

※この原稿は六月中旬に書きました。現在(九月初め)は第二波が訪れ、状況・情報も日々変わっています。内容はその時点での個人的見解となります。



児童用三密防止啓発ポスター
(周南市立菊川小学校職員作成)

地域・家庭・学校の思いや願いを つなぐPTA広報紙



下関市立熊野小学校PTA事務
コミュニティ・スクールコーディネーター

藤附理恵子



マスコットキャラクター

五月初め、毎年この時期「山口県PTA連合会主催
広報紙コンクール」受賞校決定の知らせが届きます。
平成三十年度、令和元年度と二年連続の「知事賞」受
賞。飛び上がらんばかりのうれしさで、すぐに先生方、
広報部員、印刷会社に報告したことを思い出します。

広報紙ができるまでの悩み

熊野小学校は、児童数七百七十七名の大規模校です。
PTAの委員は、毎年新しい顔ぶれでスタートします。
が正直、専門部の中で広報部の人気はありません。「学
校に出向くことが多い」「大変」というのが理由のよ
うです。広報部経験者の話を聞くと、働いている部員
が多く、限られた時間で作業しなくてはいけない。部
員のほとんどが未経験者のため、内容を決めるのも難
しかったとのこと。毎年、同じ内容になってしまいが
ちな広報紙を変えていくのには、長年苦労しました。

PTA事務として部員から「ページが埋まらない。どう
うしたらいでしよう」と相談を受け、記事を提供し
たこともあります。前年までの内容は気にせず、自分
たちの知りたいことや興味のあることを話してもらい、
広報紙作りに取り組めるよう声をかけ続けました。ま
た広報紙作りの研修会に参加し、情報を部員に伝え
きました。経験者がアドバイザーとして次年度以降も
残るシステムの導入も考えましたが、現部員に遠慮し
てなかなか発言できそうにないという理由でうまくい

マスコットキャラクターの誕生

PTA活動もコミュニティ・スクールの活動も盛ん

教職員とのコラボレーション

広報紙作りでは、原稿や写真の依頼を学校にお願い
することが多くあります。PTA事務がいる学校は少
ないため、窓口である教頭先生との連携は特に大切で
す。本校でもアンケート取材やレイアウトのアイデア
をいただきました。先生方も受賞を機に広報紙に関心
を持つてくださるようになり、依頼に快く協力してくれ
ます。また、先生と話をする機会の少ない保護
者にとつては、取材を通して学校を知ることができた
という声もあります。保護者・学校・印刷会社みんな
が一丸となつて、ひとつのものを作り上げた時、きず
なが深まりました。



知事賞を受賞した広報誌「くまの」

う感想。賞のため
に広報紙を作つて
いるわけではあり
ませんが、自分た
ちの手で作り上げ
たものが認められ
た「喜び」、それ
は「やりがい」へ
とつながつていき
ます。「やりがい」
を感じた時に、人
は次の一步へと踏
み出せると思つて
います。

な熊野小学校。これまで子どもたちのため、さまざま
な活動を行ってきたPTAですが、特にこの三年間は
コミュニケーションの活性化で充実したものになりました。その
ひとつは、マスコットキャラクターの誕生です。児童
の案を取り入れた学校キャラ「あいKUMA」は広報
紙にもたびたび登場します。昨年度の「学校キャラ甲
子園」ではグランプリを受賞しました。児童、保護者、
教職員そして地域に周知され、みんなに愛され、会話
のきっかけにもなることで、「心のふれあい 協調と
協力 家庭と学校と地域で生きる力を育むPTA活動」
という活動目標に近づいてきました。

これからの広報紙作り

今年度は、新型コロナウィルス感染予防のために、
例年通りのPTA活動ができていません。そんな中、
広報紙だけは発行することにしています。一学期は
「先生紹介」。休校や行事の中止で、先生方の顔を知ら
ない保護者や地域の方にも好評でした。

「自分たちが知りたいことをテーマにすることで、
読みたくなる広報紙につながっていく」。以前の写真
集のような広報紙からじっくり読める広報紙へと変わつ
てきたこの流れを止めたくはありません。読んだ人か
らの「おもしろかった」「テーマが共感できた」とい

て、PTA活動もコミュニケーションの活性化で充実したものになりました。そのひとつは、マスコットキャラクターの誕生です。児童、保護者、教職員そして地域に周知され、みんなに愛され、会話のきっかけにもなることで、「心のふれあい 協調と協力 家庭と学校と地域で生きる力を育むPTA活動」

新しい職務

【小口中教諭】



すてきな子どもたちとの毎日

光市立周防小学校

教諭
上野 僥斗



「今、どきね」とを

宇部市立藤山中学校

教諭木下明子



子どもの学びを支える授業作り

今年度は、コロナウイルス感染予防のための休校という、これまでに誰も経験したことのない状況からのスタートとなりました。担任として受け持つた二年三組の生徒とも、出会って一週間で、先の見えぬ別れを余儀なくされました。マスクの下の顔も知らぬまま、電話で話をすることがだけが唯一の交流手段、という異常事態でした。学校のことでも生徒のことでも何も分からぬ状態で、この未曾有の事態にどう立ち向かうのか、という大変難しい問題に直面することとなりました。そのような不安だらけの時期に、明るく温かなご指導・ご助言をくださったのは周囲の先生方です。藤山中学校の先生方はいつも私が困っていないか、悩んでいないかを気にかけ、声をかけてくださいます。そのおかげで、「今、で生きることをやろう」という前向きな気持ちで、リモート研修を受けたり、動画での授業実践を模索したりしながら、休校期間を過ごしました。

私が出会った四年生は、男子六名、女子三名で、とても仲がよく、笑顔の絶えない子どもたちでした。そんな子どもたちのいいところを授業や休み時間を通してたくさん見つけ、伸ばしていくける先生になりたいとう思いでスタートしました。

まず、子どもたちには「やつぱり学校は楽しい」と感じてほしいと思いい、始めの一週間は、子どもたちとたくさん話したり、休み時間には一緒に遊んだりしました。私は、幼いころからサッカーをしていて運動が大好きなので、子どもたちと本気でサッカーや鬼ごっこをしました。毎日それを続けていると、だんだんと子どもたちの笑顔が増え、心の距離も縮まつたように思いました。一週間が終わつたときには「学校が楽しい」と言う声がたくさん聞こえてきました。私は、子どもたちから「全力で一緒に遊ぶ」ことの大切さを学びました。

光市立周防小学校に着任して、約五ヶ月が経ちました。今年度は、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、臨時休校が続き、なかなか子どもと会うことができませんでした。本校期間中は、毎日「どんな子ども」と会うことができませんでした。

遊びだけではなく、授業も大切にしています。私は、学習に対する手意識のある子どもに焦点を当てた授業作りを心掛けています。まだまだ力不足なので、先輩の先生方の授業を参考にし、アドバイスを生かしていきます。

新規採用の国語科教員として、宇部市立藤山中学校に着任して、五か月が過ぎました。春に大学院を修了したばかりの私にとつて、中学校での生活は何もかもが日新しく、また、弦く映ります。

五月下旬になつてようやく休校が解除され、本格的な学校再開となりました。自分も生徒も、体力の低下が一番の懸案事項でした。実際に体調を崩す生徒もあり、毎日が戦々恐々、という気持ちでした。しかし、



国語科「手紙の書き方」



憧れの養護教諭を目指して

周防大島町立久賀中学校

養護教諭 宮田帆乃香



笑顔で
前向き

山陽小野田市立高千帆小学校

主事 古谷 菜々美



今月の目標の話合い（保育委員会）

学校事務職員としての知識が皆無のまま着任した四月。「分からぬところが分からぬ」という状態で、周りが忙しく動いてることに焦るばかりでした。そんな時、「まずは笑顔だよ」「遠慮せずに聞いてくれていいからね」と、校長先生をはじめ、諸先生方が温かく見守つてくださり、「ゆっくりでも確実に成長するぞ」と、次第に前向きな気持ちで業務に臨めるようになりました。

少しずつ周りが見えだした今、大切にしていきたいと思つているのは「笑顔」と「小さな一工夫」です。マスク着用の毎日ではありますが、

本校は児童数六百二十人、教職員数四十八人という中心校としての役割を担う大規模校です。保護者や地域の皆様のご支援のもと、よりよい高千帆小を目指し、児童・教職員が一丸となつて励んでいます。

学校事務職員としての知識が皆無のまま着任した四月。「分からぬところが分からぬ」という状態で、周りが忙しく動いていることに焦るばかりでした。そんな時、「まずは笑顔だよ」「遠慮せずに聞いてくれていいからね」と、校長先生をはじめ、諸先生方が温かく見守つてくださり、「ゆっくりでも確実に成長するぞ」と、次第に前向きな気持ちで業務に臨めるようになりました。

少しずつ周りが見えだした今、大切にしていきたいと思つているのは「笑顔」と「小さな一工夫」です。マスク着用の毎日ではありますが、

この春、不安半分、憧れの学校現場で働くことのできる嬉しさ半分を胸に事務職員としての一歩を踏み出しました。しかし、待ち受けていたのは新型コロナウイルス感染症の猛威。年度当初の慌ただしさはあるものの、新学期早々の休校によって静かなスタートを切ることになつてしましました。

本校は児童数六百二十人、教職員数四十八人という中心校としての役割を担う大規模校です。保護者や地域の皆様のご支援のもと、よりよい

マスク越しにも笑顔が伝わるよう意識しています。また、コミュニケーション・スクールのキャラクターをデザインした封筒を作つてみたり、玄関掲示にカレンダーを入れてみたりする等のちよつとした一工夫で、人とのコミュニケーションが生まれるようになりました。ほんの些細なことかもしがれませんが、小さなことでもできることからコツコツ積み重ねていき、事務職員の立場から明るい学校づくりに貢献できるように、尽力しています。



事務室での様子

私は「親身に話を聞いてくれて、優しい言葉がけをしてくれる養護教諭」に憧れて養護教諭になりました。生徒の中には、自分の思いを自分の言葉で伝えることのできる生徒、不安や悩みはあるが言葉にして伝えることができない生徒がいます。自分の思いを伝えることのできる生徒の話を親身になつて聞くのはもちろんのこと、なかなか伝えることのできない生徒のメッセージに気付けるような養護教諭になりたいです。

本校は、全校生徒五十一名の小規模校です。今年度で七十四年の歴史に幕を閉じ、来年度からは久賀中学校・東和中学校・安下庄中学校が統合し、周防大島中学校となります。周防大島町はとても自然豊かで、生徒はとても素直で元気いっぱいです。

着任したばかりの頃、大学で学んできたこと以外にも、様々な仕事があり、初めての事ばかりで大きな不安を感じていました。仕事をしていく中で、分からぬこと・困ったこともたくさんあります。そのような時、他の先生方が話を聞いてくださつたり、手伝つてくださつたり、とてきていることに感謝の気持ちでいっぱいです。

本校は、保健室の利用者数がゼロの日もあり、生徒と関わる機会が少なく、どのようにしたら生徒と関わる機会が増やせるのか悩んでいました。保健室にいるだけでは生徒の様子が分からぬいため、健康観察表を見て気になる生徒には教室まで足を運び様子を聞いたり、すれ違った時の様子がいつもと違うように感じたらその時に声をかけたりしています。生徒とたくさん関わることで、変化に気付き、生徒にとつて少しでも心のよりどころとなるような養護教諭でありたいと思います。

憧れの養護教諭を目指し、たくさんのこと学び、生徒とともに成長していきたいです。

この春、不安半分、憧れの学校現場で働くことのできる嬉しさ半分を胸に事務職員としての一歩を踏み出しました。しかし、待ち受けていたのは新型コロナウイルス感染症の猛威。年度当初の慌ただしさはあるものの、新学期早々の休校によつて静かなスタートを切ることになつてしまひました。

本校は児童数六百二十人、教職員数四十八人という中心校としての役割を担う大規模校です。保護者や地域の皆様のご支援のもと、よりよい高千帆小を目指し、児童・教職員が一丸となつて励んでいます。

学校事務職員としての知識が皆無のまま着任した四月。「分からぬ

マスク越しにも笑顔が伝わるよう意識しています。また、コミュニケーション・スクールのキャラクターをデザインした封筒を作つてみたり、玄関掲示にカレンダーを入れてみたりする等のちよつとした一工夫で、人とのコミュニケーションが生まれるようになりました。ほんの些細なことかもしけませんが、小さなことでもできることからコツコツ積み重ねていき、事務職員の立場から明るい学校づくりに貢献できるように、尽力しています。

新しい職務

【高・総支教諭】



昔惚びて希望に燃ゆる

山口県立豊浦高等学校

教諭 田津 龍平

このたび、関門海峡を望む下関の豊浦高等学校に赴任しました。本校は、百二十年の歴史と伝統があり、「文武一徳」の人づくりを教育目標としています。素直で毎日気持ちよい挨拶をする生徒たちや専門性が高く個性豊かな先生方が、授業に部活動等に日々全力を注ぐ、活気溢れる校風です。

実は三年前、臨時採用教員として一年間、私は本校でお世話になりました。縁あってこの学校で再びスター



同時に、以前よりも大きな責任感・使命感があり、襟を正す思いです。社会の流れの著しい変化に伴い、生徒の実態も多様化する現状に対応しながら本校においての目標達成のために、務めを完遂することが求められる立場になつたからです。英語の授業や第一学年男子クラスの副担任、生徒会をはじめとした生徒指導、そして陸上競技部と、様々な方面で駆け回り挑戦しながら、進取向上のための貴重なご教授を賜っています。

さて、表題の「昔惚びて希望に燃ゆる」。これは、本校校歌の歌詞の一部です。昔から大事に受け継がれ、これからも必要な豊高生のよさは何



か。それは、先に述べた活力に加え、自治協同する力だと考えます。

英語の授業では、All-Englishでタスクを行なつたり、生徒会では、苦境の中でも地元を支えておられる城下町長府の企業・団体に応援メッセージを贈つたりしています。部活動は、限られた条件で恵まれた環境をいかに活かすか、学級では、探究学習や行事に際して今のクラスだからできることは何かを、生徒が模索し実践しています。

「答えは生徒の中にある」という教えを胸に、至誠一貫、人を教育てるプロとして、目の前の生徒やその言動から気付きを得、考え、行動して参ります。

私は令和二年度に新規採用の教員として、本校に赴任しました。三月まで学生だった私にとって、一つひとつ仕事が初めてのことで右も左もわからないうえに、今まで特別支援学校での実習経験はほとんどなく、不安を感じていました。さらに今年は新型コロナウイルスの影響で、赴任してすぐに臨時休業に入つたため、生徒の実態を把握できていません。どんな指導・支援を行えばよいのかわからず悩んでいました。生徒に授業へ参加するよう促すだけでも、どうな手立てがよいのか毎時間考えています。いろいろな方法に挑戦しますが、うまくいかないことも多く、この仕事の難しさを痛感しています。

そんな未熟な私に先輩の先生方は助言や指導をして下さり、日々学ばせていただく中で、生徒と真剣に向う覚悟ができました。



新規採用教員として

山口県立萩総合支援学校

教諭 松本 和也

萩総合支援学校は、山口県の北部、日本海側に面した、自然豊かで落ち着いた環境にある学校です。児童生徒は萩市を中心として、北は島根県境から西は長門市まで、たいへん広い範囲から毎日スクールバスで登校しています。校訓である「笑顔努力協力」をもとに、毎日元気いっぱいに学習に取り組んでいます。

私は令和二年度に新規採用の教員として、本校に赴任しました。三月まで学生だった私にとって、一つひとつ仕事が初めてのことで右も左もわからないうえに、今まで特別支援学校での実習経験はほとんどなく、不安を感じていました。さらに今年は新型コロナウイルスの影響で、赴任してすぐに臨時休業に入つたため、生徒の実態を把握できていません。どんな指導・支援を行えばよいのかわからず悩んでいました。生徒に授業へ参加するよう促すだけでも、どうな手立てがよいのか毎時間考えています。いろいろな方法に挑戦しますが、うまくいかないことも多く、この仕事の難しさを痛感しています。

これからも、一番に生徒のことを考へる教員を目指していきます。生徒の成長につながる授業を心掛け、先輩教員の方々から技術や知識を学び、職務に励んでいきます。

なぎさ水族館



大島大橋を渡り左折、海に浮かぶ島々を望みつつ、島の東端まで車を走らせること四十五分。左側に白を基調としたなぎさ水族館に到着。これが水族館?と思ふほどの小さな建物ですが、たくさんのアイデアが詰まっています。

地元の海の生き物

嶋井次氏の尽力によりなきさ水族館が完成 現在は タン
チングブールを備え、四十の水槽に八十種類七百五十の
魚類が展示されています。

展示されているほとんどの魚は、地元の漁師さんから
の提供です。また、白いナマコや白いヒラメが捕れたと
連絡があり、防府まで取りに行つたこともあります。さらには、地元
の子どもが、ハゼ、カニなどを持つてくることもあり、
魚の購入費はかかりません。

年間約二万五千人程の人々が訪れます。広島から周南市
までの方がほとんどで、年配の方からは「見た目よりいい
といわれることが多いそうです。



四型の水槽でクラゲを飼育



屋内タッチングプール



For more information about the new *Journal of Clinical Psychopharmacology*, contact the journal office at 1-800-393-6340 or 301-531-3345.

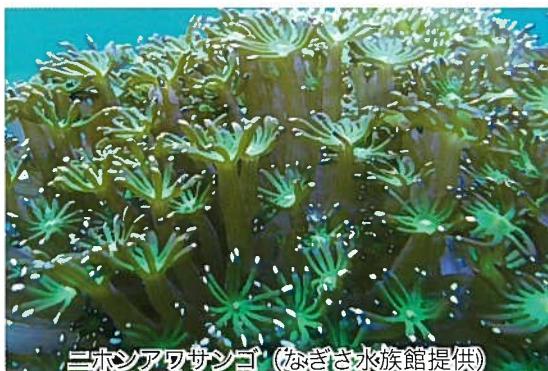


手書きの説明書

地域密着

地域との結びつきの深い本館では、自分が大切に育てたオクラを、展示してほしいと近所の子どもから頼まれ、水を入れない水槽でオクラ一本を展示したことがあつたそうです。また、地元高校生が海洋学部受験のため、面接の練習に訪

的でした。別の水槽では、無数の小さなクラゲを見る事ができます。



ニホンアワサシゴ(なぎさ水族館提供)

ひときわ目を引く
二〇一六年十月三日、本館学芸員の内田博陽さんが「海の花束」と呼ばれるニホンアワサンゴの人工繁殖に成功。近くの群生地で採取した幼生を館内で育てました。人工繁殖の成功例は全国的に珍しいですが、本館で飼育中の個体が公開されおり、とても綺麗な緑色の触手を動かしているのを見ることがあります。昨年は半数が死滅しがあり、現在でも試行錯誤の繰り返しです。

ここには、大きい水族館とは違う楽しみがあります。

面白いのは水槽の上に貼つてあるスタッフ手書きの説明書です。その魚の特徴をよく捉え楽しく表現したり、魚の調理方法や地元のレストランを紹介したりして、地域の方に親しまれるような取組を積極的に行っています。

住所：〒742-2601 山口県大島郡周防大島町伊保田2211-3
TEL/FAX 0820-75-1571
開館：9:00～16:30（最終入館16:00）（最終入館16:30）
休館日：12月30日～1月2日
入館料：大人210円（160円）、小中学生100円（80円）
※（ ）内は20名以上の団体料金
なぎさ水族館・陸奥記念館共通券
大人590円 小中学生260円

退職後を振り返つて



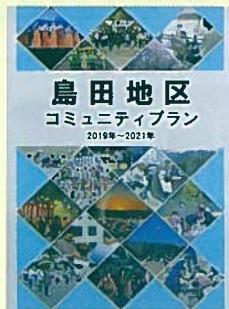
光支部
村中 民義

定年退職の挨拶状に「感謝とともにこれからは自然や様々な人との出会いを求めてゆつくりと歩みたいと思います」と記していました。

出会いを求めて

周南市の適応教室に一年間勤め、二年目、重責とは知りつつも島田公民館長を承引しました。当時、公民館は教育委員会の所管で、社会教育、生涯学習の場であり、その役割を果たすことと意気込んでいました。しかし、恥ずかしいことに、館の業務役割が地域住民の生活全般にわたっていることがわかつていませんでした。

折しも、館長就任の平成二十年、光市立島田公民館は「地域のことは地域で」という人事も含めて自主運営になりました。そして、平成二十八年に島田公民館は島田コミュニティセンターと名称を変え、地域の生活全般にわたり様々な課題の解決に向けて協働し、地域住民の生活の充実を図ることを目的とした島田コミュニティ協議会が発足しました。平成三十一年には地域づくりの一層の充実のため、島田地区コミュニティプランを策定しました。振り返れば、変動、改革の時代でした。



現役時代も地域とともに学校教育に携わってきたつもりでしたが、こんなにも広い領域、生活全般に渡つて活動が行われており、本当の地域たるものを感じました。さらに、住民一人一人が地域づくりに参加されていること、それもボランティアでの貢献であることなど、地域



自然との出会いを求めて
学生時代から地質に興味を持ち、継続していたこともあり、地質に関する学習を思い出し、地球の成り立ち、ロマンを味わつてみました。平成二十五年から平成三一年まで、北海道から沖縄まで日本列島縦断、ユネスコ世界ジオパークに認定されているアポイ岳、洞爺湖有珠山を始め九か所、ジオパーク認定一七地域、ジオパークではないが自分で地質現象を調べ巡査した十二地域、そのジオパークの特徴、地形、地質露頭など地点を調べ、いわゆる、オリエンテーリングのように日程、時間を組み、車で巡査する。見学地点に辿り着き、実際に地質現象に対する醍醐味は、感動さえ覚えるジオ巡りとなりました。こうして振り返つてみると、よくぞ、自然との出会いを求めて趣味を満喫したものだと思います。

これからも、社会とのつながりや趣味を生かし、人と自然への出会いを求めていきたいと思います。
そして、今までいくらか must であつた生活を want の生活にしてみたいのです。

そうなんだ、心赴くままに…。

を愛する人々の活動、姿をまざまざと見せつけられたものです。まさにカルチャーショックでした。様々なコミュニティ活動に携わる中で島田コミュニティ協議会の充実、発展に尽くされている多くの人々との出会いができたこと、教職時代には味わえなかつた数々の体験ができたことに再び感謝です。本当に、有意義な九年間でした。

終身会員の紹介 松本 正子 様（下関）



就任のごあいあつ
一般財團法人山口県教育会
事務局長 山本 晃久

四年間に渡り多くの職責を果たしてこられた吉岡周三事務局長が、去る六月十二日に開催された定期評議員会をもつて退任され、その後を引き継ぐことになりました。

平成十一年、当時の会長大田恭次氏の下で刊行された「山口県教育会誌」には、本会が明治十五年（一八八二年）に、当時の県令（知事）原保太郎氏によって創設されたことが記されています。当時は、県下の教育に関する重要事項や施設の改善について研究討議する県令の諮問機関でした。その後百三十八年間、その姿は社団法人から財團法人山口県教育振興会、さらには財團法人山口県教育会へと組織形態を変えながらも、「民間教育団体としての主体性の堅持」、「新たなイメージを持つ開かれた教育会」、「生涯学習体系への位置づけを明確にした事業・活動の展開」の基本方向は保ちつつ現在に至っています。そして、昭和五十二年の最盛期には二万人を超えていた会員は、高齢化の進行と意識状況の変化により、現在では一万人を割り込んでいます。より多くの県民のみなさまに本会の事業活動をご理解賜り、入会していただることは、喫緊の課題であると捉えています。また、会員のみなさまからお預かりする限られた予算をより有效地に活用して、学校や幼稚園等をはじめ県下二十七支部のみなさまの教育振興活動の有り様に寄り添い、いつそうの進化と発展を支えることができるよう、一般財團法人としての土台と骨組みを強固なものにさせていくことが、私に課せられた責務と捉え尽力する所存です。

老朽化するとともに入居団体が減少傾向にある教育会館の維持、管理、改善も本会にとって大きな課題です。令和五年度には、日本連合教育会研究大会山口大会が開催されます。これには多くのみなさまのご協力が必要となります。

課題山積ではありますが、今後も多くのみなさまから熱きまなざしと志を賜ることができますようお願い申し上げ、就任のごあいあつといたします。